

平成 28 年 10 月 11 日

報道関係各位

東京都港区赤坂 1-11-44  
株式会社 QLife(キューライフ)

---

**薬剤師の 47%が、「医師が必要以上を処方」を残薬問題の一因と指摘  
医師への働きかけや患者への聞き取りに苦慮し、製薬会社への要望も多数  
～薬剤師からみた「残薬問題」調査～**

---

月 600 万人が利用する日本最大級の病院検索・医薬品検索・医療情報サイト群ならびに医療者向けサービスを運営する株式会社 QLife(キューライフ/本社:東京都港区、代表取締役:山内善行)は、「残薬問題」に対する現場の薬剤師の見方を調査した。調剤薬局に勤務している薬剤師 300 人を対象にインターネット経由で訊いたもの。

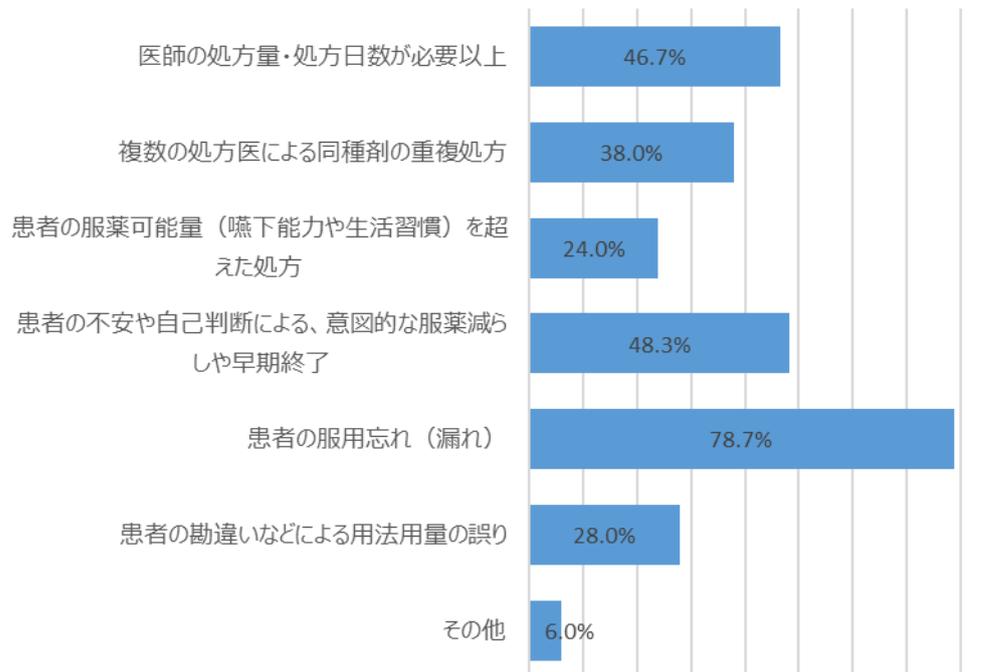
調査の結果、残薬の原因として 8 割が「患者の服用忘れ(漏れ)」を挙げつつ、4 人に 1 人以上が他の理由(全 6 要因)をも指摘する結果となり、残薬問題の多面性・複雑性がうかがえた。また医療者側の原因としては、よく言われる「複数の医師による重複処方」よりも「医師が必要以上の量・日数を処方」を問題視する人の方が多く、病院門前薬局では 58%、全体でも 47%を占めた。

次に、こうした状況において「薬剤師が貢献できること」や「製薬会社が薬剤師を支援できること」を訊いたところ、昨今増えているブラウンバッグ(節薬バッグ)を製薬会社に提供してもらいたいなど、具体的な意見が多数寄せられた。一方で、医師への働きかけ、患者への聞き取りに薬剤師が苦慮している実情が多く語られ、製薬会社に両者への啓発情報を発して欲しい旨の要望があった。

今回の結果について、東京理科大学薬学部臨床准教授の水八寿裕先生は以下のコメントをした。「今回は残薬の直接的要因に絞った実態確認と、薬剤師がそこで果たすべきことは何か、という 2 本立ての調査になっているが、後者のアクションがまだまだ不足していると思う。特に高齢の患者さんは自己負担割合が低いこともあり意識が乏しい印象があるが、そこで薬剤師が貢献できる余地は大きい。また医師へのフィードバック方法にも変化が必要で、疑義照会・お薬手帳などを活用して残薬解消提案をスムーズにできるよう、患者の考えを最大限に尊重しながら医療機関との協議をもっと進めるべきだ」

※本調査の報告書は [http://www.qlife.co.jp/news/161011qlife\\_research.pdf](http://www.qlife.co.jp/news/161011qlife_research.pdf) からダウンロード可能

■「残薬問題」の原因として大きなものは何だと思いますか(複数回答)



■患者さんの「残薬問題」を解消するために、現場で薬剤師がすべきことは何で、そのために「製薬会社が薬剤師を支援できること」は何だと思いますか。

回答の多かった内容をテーマ分類すると以下のとおりであった。

- 医師へのフィードバックや提案
- 処方日数の短縮や、分割調剤
- 服用手間・回数負担を減らす
- 患者が残薬を打ち明けられる環境づくり
- 患者への聞き取り強化
- 患者のアドヒアランス意識を向上
- 患者への残薬問題の啓発

また、具体的な回答文の例は以下のとおり。

○医師へのフィードバックや提案

現場で薬剤師がすべきこと	製薬会社が薬剤師を支援できること	属性
医師側への重複投与をもっと厳しく監査し、意見を言う。	医師側への重複投与をもっと厳しく監査することへ医師側からの圧力を和らげるような働きかけ。	女性,40代,11-50店舗,病院門前
患者さんに聞き取り、残薬がある場合はその対処法提案、医師にフィードバック。	医師に残薬確認の提案。	女性,30代,51店舗以上,病院門前
残薬の状況を毎回確認し、医師へフィードバックを行う。残薬が多い患者さんに関し話し合う機会を設ける。	医師へ残薬確認を促し、薬剤師から提案しやすいような環境作りを行う。	女性,30代,2-5店舗,診療所門前
薬剤師がすべきことは、必要以上の薬が処方されていた場合、臆せず医師に連絡すること。	医師に必要以上に薬を処方しないよう啓発すること。	女性,40代,2-5店舗,診療所門前
医師へのフィードバックや提案。	医師への残薬報告が必要だが、医師が協力しない限りなくならない。多く残薬があって患者さんがいらないと疑義しても削除しない医師が周りに多すぎる。MRの方が薬の紹介だけでなく医師に働きかけてくれると助かる。	男性,30代,単店,病院門前

○患者が残薬を打ち明けられる環境づくり

現場で薬剤師がすべきこと	製薬会社が薬剤師を支援できること	属性
残薬の確認。医師にのみわすれたと言うと、怒られると思っている人が意外に多いので、大丈夫だという説明を患者にする。	啓発用のパンフ作成や、服薬支援キットなどをそろえてほしい。	女性,40代,2-5店舗,診療所門前
残薬ははずかしいことではないよと、話ができる環境作り。ブラウンバッグ（節薬バッグ）の提供。	ブラウンバッグ（節薬バッグ）の提供。	男性,40代,単店,診療所門前
正直に話すと怒られると思っていたり、話すメリットをあまり感じていない患者さんも多いので、話しやすい雰囲気づくりや残薬解消のために処方日数を減らせれば料金が安く済むなどのメリットを提示して、話してもらえよう努力する。	飲み忘れの多い薬はヒートに工夫をするなどし、飲み忘れをわかりやすくできたら助かる。	男性,30代,51店舗以上,診療所門前
残薬について打ち明けてもらえる関係性作り。	慢性疾患薬について自己判断で中止や休薬しない薬について指導箋を個別に作る。	男性,40代,51店舗以上,面分業
服薬を継続しても心配ないと安心させること。	薬に関する添付文書以上の実際のデータを薬剤師に提供出来るとよい。	男性,30代,11-50店舗,診療所門前
何のために服用するか納得いくよう説明する。	患者説明のための資材などがほしい。	女性,50代,2-5店舗,診療所門前)
積極的に残薬を持ってきてもらうこと。	服薬チェック表を作ってほしい。	男性,20代,11-50店舗,病院門前
患者さんにもルーチンのように受診前に残薬を数えてきてもらい、投薬中に薬ごとに残薬の確認をしていく。	出来ればすべて10錠包装にする。14錠や21錠があると間違えやすいので。	男性,50代,2-5店舗,診療所門前



## 【調査実施概要】

▼調査主体 株式会社 QLife(キューライフ)

### ▼実施概要

- (1) 調査対象： 調剤薬局に勤務している薬剤師
- (2) 有効回収数： 300 人
- (3) 調査方法： インターネット調査
- (4) 調査時期： 2016/08/10～2016/08/20

---

### <株式会社 QLife の会社概要>

会社名： 株式会社 QLife(キューライフ)

所在地： 〒107-0052 東京都港区赤坂 1-11-44 赤坂インターシティ 10F

代表者： 代表取締役 山内善行 設立日： 2006 年(平成 18 年)11 月 17 日

事業内容： 健康・医療分野の広告メディア事業ならびにマーケティング事業

企業理念： 医療と生活者の距離を縮める URL： <http://www.qlife.co.jp>

---

本件に関するお問い合わせ先：

株式会社 QLife 広報担当 田中 TEL : 03-6685-2515/E-mail : [info@qlife.co.jp](mailto:info@qlife.co.jp)